

案

【資料 3】

令和 6 年 月 日

芦屋町長 波多野 茂丸 様

芦屋町文化財保護委員会
会長 石川 匡宏

芦屋町指定有形文化財の新規指定について（答申）

令和 5 年 11 月 27 日付け 5 芦釜芦第 517 号で諮問されました芦屋町指定有形文化財の新規指定について、下記のとおり答申します。

記

1 芦屋町指定有形文化財に新規指定すべき資料

- (1) 金屋遺跡出土品 2 点（芦屋釜鋳型 1 点、こしき炉基底部 1 点）
- (2) 合戦ヶ原出土素文平釜 1 点

2 答申の理由

当該文化財は、中世に芦屋釜を生み出した芦屋鋳物師に関連する資料であり、芦屋町にとって、文化的価値が高く、貴重であるため

指定案件

種 別	芦屋町指定有形文化財（考古資料）
名称及び員数	かなやいせきしゅつどひん あしやがまいがた ろきていぶ 金屋遺跡出土品 2点（芦屋釜鋳型1点、こしき炉基底部1点）
所 在 地	芦屋町歴史民俗資料館（芦屋町大字山鹿1200）
所 有 者	芦屋町（芦屋町歴史民俗資料館）
現 状	<p>【芦屋釜鋳型】</p> <p>真形釜の鋳型の一部である。外型の幅置（はばき）および羽部、胴部の一部で器になる部分は青白色に還元されている。</p> <p>径約3mmの竈が胴部を巡り、真形釜特有の曲面を持つ羽が確認できる。</p> <p>【こしき炉基底部】</p> <p>鉄や青銅を溶かすための溶解炉であるこしき炉の基底部である。</p> <p>直径10～15cmの石を円形に敷き詰め、周囲を粘土で固めている。</p> <p>これは、こしき炉を固定するとともに、水分を遮断するためであったと考えられる。敷石の一部は熱を受け変色している。炉の周辺からは、炉壁の一部や鉄滓も出土している。</p> <p>【芦屋釜鋳型】</p> <p>高さ5.0cm、幅11.9cm、奥行6.3cm</p> <p>【こしき炉基底部】</p> <p>約75cm（基礎部分全体の直径）</p>

考古資料

かなやいせきしゅつどひん
金屋遺跡出土品

本文化財が出土した金屋遺跡は、芦屋町中ノ浜に所在し、旧字名は「金屋」である。平成 5 年度の試掘調査、平成 6 年度と平成 7 年度の発掘調査では、こしき炉とよばれる溶解炉の炉壁、羽口鋳型やこしき炉を据えたとみられる焼結層、茶の湯釜の鋳型等が出土し、鋳造遺構であることが確認された。特に、出土した茶の湯釜の鋳型は、芦屋釜の鋳型であると断定できるものであり、芦屋釜の生産遺跡としての当遺跡の重要性を決定づけるものとなった。また、平成 10 年度と 11 年度の発掘では、自然石と粘土で構築されたこしき炉の基底部が出土し、当時の溶解装置の一端が判明する貴重な発見となった。

芦屋釜鋳型は、外型の幅木（はばき）及び羽部、胴部の一部であり、高さ 5.0 cm、幅 11.9 cm、奥行 6.3 cm を測る。胴部には径約 3 mm の霞文が施文されており、羽は真形釜に特徴的な鋸羽（しころば）とよばれる形状である。鋳型より推定される製品は胴径 28 cm、羽径 30 cm であり、大ぶりの真形釜であったと考えられる。本資料は、芦屋鋳物師の活動が衰退し、廃絶する時期である 16 世紀初めから 17 世紀初頭頃に位置付けられる。

こしき炉基底部は、金属を溶かすための溶解炉を据えるための部分である。こしき炉基底部の構造は、地面にくぼみを作つて粘土を貼り、ガラス化したこしき炉の炉体破片（過去に使用した炉壁の破片）を置き、その周囲に平らな自然石を敷いて粘土で固めている。操業時には、この基底部の上にこしき炉を構築する。共伴遺物からの年代推定はできないが、資料の用途と遺跡の性格から芦屋鋳物師活動期の室町時代の遺構であることは明らかであり、工房廃絶とともに遺棄されたものと考えられる。

金屋遺跡から出土した芦屋釜鋳型及びこしき炉基底部は、芦屋町にとって学術的価値が高く、貴重な文化財である。

指定案件

種 別	芦屋町指定有形文化財（考古資料）
名称及び員数	かつせんがはらしゅつどすもんひらがま 合戦ヶ原出土素文平釜 1点
所 在 地	芦屋町歴史民俗資料館（芦屋町大字山鹿 1200）
所 有 者	芦屋町（芦屋町歴史民俗資料館）
現 状	鋳鉄製。全体をさびに覆われているが、その造りは精巧である。 取っ手は本体とは別製で、接続部に花形の座金を用いるなど、 細部に配慮されている。共蓋が付属する。
法 量	胴径（羽を除く） 29.4 cm 口径 18.8 cm 高さ 14.5 cm
由来、伝来等	合戦ヶ原とよばれる砂山から出土。出土状況は不明。

考古資料

かっせんがはらしゅつどすもんひらがま
合戦ヶ原出土素文平釜

昭和33（1958）年7月、芦屋町の合戦ヶ原とよばれる砂山（当時は砂取場）の頂上から5～8m下の地点で発見された。共伴遺物は無く、詳細な出土状況は不明である。

形は平釜で、口部には低い繰りを施し、胴部の直羽（すぐは）には環をつける。口造りは、門がきっちりと立ち、手抜きの無い仕事ぶりがうかがえる。環を取り付ける金具は釜の本体とは別製になっている。金具を釜に装着するにあたり、金具の下に花形の座金が置いてあり、製作者の細かい配慮がうかがえる。

蓋は釜と同じく鋳鉄製で、直径21.1cmである。摘みは円柱状の突起に孔があいており、飾り気は無い。蓋裏には、本体の口部にきっちりとはまるよう、一条の突起を設ける。

茶の湯に用いたものか、一般の煮炊き用かは不明だが、おそらく後者の方であったと考えられる。中子造型は、芦屋鋳物師に伝わる挽き中子法によるものと思われ、芦屋鋳物師に関連する作品とみられる。作品の製作年代は、芦屋鋳物師活動期の室町時代に位置付けられる。

芦屋鋳物師が活動した金屋地区に近い場所から出土していることは注目される。また、全体がさびに覆われているものの、その造りは精巧であり、芦屋鋳物師に関連する資料とみてよい。

合戦ヶ原出土素文平釜は、芦屋鋳物師関連資料として文化的価値が高く、貴重な文化財である。